

森岡書店は、「一冊の本を売る書店」をテーマに、その本から派生するような展覧会を開催しています。この度の戸田吉三郎回顧展でも、『戸田吉三郎画集』の販売と戸田吉三郎が遺した油絵を3点展示する予定です。戸田吉三郎については、今回あらたに「経歴」が編まれましたが、全貌を理解するのは、ここから始まろうとしています。

『戸田吉三郎画集』は不思議な本です。通常ならあるはずの、序文や解説が、まったくありません。そればかりか絵画の制作年代も記されていません。油絵の裸婦がたんと続くん。これは戸田吉三郎が望んだ自身の画集の編集方針だと思います。言葉のない画集を、私たちはどう捉えれば良いのでしょうか。

そのヒントは、戸田吉三郎の妻であった順子さんの話にあるようです。順子さんは次のように述べます。「真理を描こうとしていた」「鈴木大拙が会話の叩き台だった」戸田吉三郎は裸婦画を描くことを通して、人間の真理に迫ろうとしていたといえます。おそらく裸婦には戸田吉三郎の見た真理が込められている。でも裸婦の解釈はどこまでも鑑賞者に委ねられている。言葉は待たれている。これが戸田吉三郎の絵画の現在なのではないでしょうか。戸田吉三郎は生涯絵筆をとることを止めませんでした。

本に掲載された裸婦の数々を見ると制作背後には並々ならぬものがあったことが伝わってきます。戸田吉三郎の裸婦を見ることは、もしかしたら鏡を見ることに近いかもしれません。そこに写っているのはある女性の姿であるようでいて、鑑賞者自身の心情に他ならない。戸田吉三郎は自身の絵画をそう考えていたような気がしてなりません。

森岡督行
(森岡書店 店主)